

## 出土楽器が語る音の世界—笙—

## 匏の楽器

古代中国では、八音（土・匏・皮・竹・糸・石・金・木）という材質による楽器分類がなされていた。そのなかで、瓢箪の一種である「匏」は、そのものの形が楽器の底部分（現在日本雅楽では「頭」と呼ばれる）を形成する点で、他の七種がその材質を用いて自由に形成されるのとは異なるように思われる。「匏」に属する楽器は、「笙」と、それを少し大型化した「竽」の二種類のみであり、どちらも匏に十数本の竹管をさし、匏につけられた吸い口から息を出し入れして音を出す。

笙は古代の祭礼の主要楽器であった。『詩経』小雅「鹿鳴」に饗宴の歌として「我に嘉賓有り、瑟を鼓き笙を吹く」とあり、『儀礼』郷飲酒礼篇でも、瑟とともに奏楽の主要楽器とされている。また、『周礼』春官にも、埙や簫など様々な管楽器を教える者を一括して「笙師」と称することから、古代の宮廷音楽奏楽の主要楽器であったことがわかる。実際に、左の写真のように、表面が漆塗りの笙が、曾侯乙墓（紀元前 433 年頃）から出土している。（王子初『音楽考古』文物出版社 2006

年 164 頁参照）。

## 調和をもたらす音

その笙はいかなる音色であったのか。「文は文集、文選」（『枕草子』）というように、日本でもよく知られた『文選』に収められた潘岳「笙の賦」には、鳳に似た笙の形態や、調和を生み出す音のありようが述べられている。

取り出した笙の姿は、輝かしい竹管が厳かに並び、つがいの鳳が鳴き交わすように見える。笙の演奏を聞けば、琴の名手師曠も驚きのあまり、琴を投げ捨てよう。まして斉の瑟や秦の箏では問題にもならない。新奇な曲が変化して現れ、自在に溢れだす。歌声や鼓の音を取り巻き、すべての音階を覆い尽くす。……その音は宮（音）より低くならず、羽（音）より高くならない。古の堯の「大章」、禹の「大夏」を歌い始め、舜の「大韶」、周の武王の「大武」へと移りゆく。陳国と宋国の歌を調和させ、斉国と楚国の歌を一つにする。（光岐儼其偕列、双鳳嘈以和鳴。晉野悚而投琴、況齊瑟与秦箏。新声变曲、奇韻横逸。繁纏歌鼓、網羅鍾律……大不踰宮、細不過羽。唱発章夏、導揚韶武。協和陳宋、混一齊楚）（明治書院 新釈漢文大系『文選』（賦篇）下 331 頁参照）

笙という楽器が放つこうした音のありようは、「笙の賦」が『文選』に収められたことで、確実に後世へ伝えられた。

## 唐詩に詠じられた笙のイメージ

笙はその形態からか「鳳笙」といわれている。それを題名にした唐初の沈佺期「鳳笙の曲」（『全唐詩』巻 21）では、「憶う昔 王子晉、鳳笙 雲空に遊ぶ」と詠じられる。この王子晉は、周の靈王（在位 B.C.571 ~ B.C.545）の皇太子で、得意な笙で鳳凰の雌雄の声を吹き分けたが、あるとき道士の浮丘公に従って白鶴に乗って仙界へ去ってしまった（『列仙伝』）。笙は、こうした王子晉の故事とともに、俗世とは離れた世界にいざなう音楽として詩のなかに用いられていく。李白「鳳笙篇」（『李太白全集』巻 5）にも、「学ぶ莫かれ 笙を吹く王子晉、一たび

浮丘に遇いて断えて還らず」とある。また、仙界に行ったはずの王子晉だが、白居易には「王子晉の廟」（『白居易集箋校』巻 28）と題した詩があり、「子晉廟の前 山月明るく、人は聞く 往往にして夜に笙を吹くを」とある。こうして、笙は王子晉の吹いた楽器として詩に詠じられた。

一方で、笙の実際の音色については、唐詩に美しく詠じられた「琵琶」や「琴」や「箏」などの楽器とは異なり、とりたてて言及がない。それよりも、「笙歌」として用いられることが多い。それは、古の雅楽奏楽に用いられたことから、民間の祭礼に使われる音楽として、たとえば白居易が杭州に知事として赴任した際に、「燈火 家家の市、笙歌 処処の楼」（『正月十五日夜月』同巻 20）として、上元節のにぎやかさを詠じている。また、「花有り酒有り笙歌有り、其れ逢い難き親故を奈何せん」（『寄明州于駙馬使君 三絶句』その一 同巻 32）と、花と酒と並列して宴席を詠じた例もある。さらには、「海仙の楼塔 晴れてはじめて出で、江女の笙簫 夜に始めて吹く」（『重題別東楼』同巻 23）というように、仙界と結びつけながら、笙は簫とともに「ふえ一般」と解釈され、具体的な楽器の姿よりも、その言葉による音楽イメージが先行しているようである。日本の笙

笙は、日本にいつ入ってきたのだろうか。『隋書』音楽志には、その宮廷音楽である「九部伎」のなかの、「清楽」「礼畢」だけでなく、外来色が濃厚な「龜茲」の楽器編成のなかにも、笙の名がみえる。唐代宮廷の「謙楽」（宴饗音楽）のなかにも、さまざまな楽器に雑じて「大笙」「小笙」という記載がある（『旧唐書』音楽志）。遣隋使・遣唐使として長安へ行った日本の使者たちは、その演奏を実際に聞いたことであろう。もっとも唐代には匏に代えて現代と同じように木に漆を塗ったものを用いるようになっていた。大宝元年（701）制定の大宝令の雅楽寮の規程に、外来音楽を掌る「唐楽師十二人」「唐楽生六十人」がみえる。その内訳は、「歌・横笛・尺八・簫・箏・笙・篳篥・琵琶・箏・方磬・鼓・舞」とある。現在の日本雅楽の楽器構成とは少し異なるが、笙は確かに入っている。東大寺の大仏開眼供養会（752 年）では、唐楽など外来音楽も盛大に披露された。当時の笙の姿は国宝である東大寺八角燈籠にしっかりと刻まれている（下図 笙をもつ音声菩薩 『東大寺国宝金銅八角燈籠修理報告書』東大寺 1999 年より）。それは息を出し入れする口の部分が明らかに日本雅楽の笙とは異なる。この部分は、平安時代に短くなったと言われている。我が国では堀河天皇以来、帝王学をなかで「楽」を学ぶべきものの一つとして明確に位置付け、笙を習得する天皇もあった。また、源氏嫡流の「貴種」性を確立するために尊氏を始めとする足利將軍も笙を習得した（豊永聡美『中世の天皇と音楽』吉川弘文館 2006 年参照）。笙は、我が国に伝わって、祭礼の主要楽器の一つとして中国古来の役割を変えることなく保持していった。いま日本雅楽の調べを聞いても、「歌鼓を繁纏し、鍾律を網羅する」音色が聞こえるようである。

